

も初陣の緊張に武者ぶるひしてゐた。

餌投げ係はイワシをかめ、こから餌投げ箱にうつして船首と胴中と鱧の三ヶ所に待ちかまへ、餌くぼりは小桶に餌を入れて釣手の足もとへ運びつける。

近づくにつれて、鳥ばしらの下は、茄子紺に墨をながしたやうに、黒々と縞けだつてゐるのが見える。

「おゝッ、えゝなぶらだぞオ！ ガーッとえゝなぶらだッー

初めて見参する南海の魚群に、漁師たちは狂氣のやうにわめき、目を血ばしらせて足ぶみしてゐる。

鳥ばしらに突つこむと同時に、餌が投げられた。ナイフのやうにキクリと光つて海面に舞ひおちたイワシは、見るまに魚群に吞まれてしまった。

「ワーツ、食つた。食つた、食つたぞオ！」

叫びと同時に、舷側に三十數條ズラリとならんだポンプ仕掛の放水口から、サーッと一せいに水煙が噴きだした。

舳乗り一番の大任をおふ正太のイワシが、まつさきに宙に舞つたと思ふと、次の瞬間、グツとしなつた竿の下から、三尺もあらうといふ大鯨が、ズボリと水を切つてはね上つてきた。これが初漁第一番の記念すべき獲物だつた。

しめた、餌つきはいゝぞ！ きほひたつた漁師たちは、争つて釣りだした。

「ヨーイショ！」

「ドッコイショ！」

呵呷の氣合が全船にみなぎつて、竿は織るやうに舞ひ光り、そのたびに鯨のむれは拋物線を描がいて甲板へとびこんでくる。

あちこちで、ドタツ、バタ／＼と、甲板をうつ音が一つになり、それに漁師のわめき聲、撒水ポンプのひゞきが交錯して、船全體ワーンとうなつてゐるやうだ。

釣手も今は半狂亂だつた。目の色がかはり、頬がひきつてゐる。永いあひだ鯨竹から遠ざかり、脾肉の嘆をかこつてゐた彼らも、今こそ思ふぞんぶん、ゑんりよゑしやくもなく釣りまくる。それはまるで鯨の雨が降つてくるやうな壯烈な情景だつた。

すでに甲板は鏝の山となり、かめ、こにまでこぼれおち、船體はドツとかしいできた。もう三千釣つたか、五千釣つたか、たれもかれも久しぶりのこととて、腕がしびれ、腰がふらつき、胸はあへいだ。が、やめるわけにはいかぬ。

「えーい糞ッ、もう一丁……それ来た、もう一發……お國のためだ、メリケン打倒だ、それまた食つた、ウントコシヨ……ドッコイシヨ……」

まるで砲弾か魚雷でも釣上げるみたいに、漁師たちは齒をくひしぼり、目玉をひんむいて、なほも死物狂ひに竿をふり廻した。

四

人と魚と——その凄愴な戦ひは、いつ果てるとも分らなかつた。

いかつ太陽は海の彼方に沈み、まつかな夕映が空一めんに輝きだした。

そのとき突然、ブリツチから船長の大聲がひびきわたつた。

「やーい、見ろ、見ろ、あそこに潜望鏡が見えるぞ！」

じつに、青天の霹靂だつた。

漁師たちはハタと竿を止め、船長の指さす方をながめた。まさしく、右舷後方半漕のあたりに、棒のやうなものがポツンと突き出てゐる。目のするどい漁師には、それが潜望鏡であることがすぐ分つた。

「わーッ、潜水艦だ、潜水艦だ！」

「いま浮上るとこだぞッ」

「敵か……味方か……」

一瞬、船上には重苦しい沈黙がみなぎつた。

「とにかく、はア釣りはやめて、みんな部署につけ」

船長の命令で、あわてゝ、竿はねかせたが、あまりに突然のことなので、たれも彼も動きがとれぬ恰好のまゝ立ちすくんでゐた。

その薄気味わるい緊張のうちに、やがてモクモクと浮上つたその司令塔から、蝗のやうにとびだしてきたのは、白の帽子も見なれた日本水兵の姿だつた。目のさめるやうな軍艦旗も、すぐ見

えてきた。

「わーッ、日本だ、日本だ、萬歳、ばんざーい！」

手をふり、をどり上つて叫ぶ。誰の目にもホツとした安堵の色と、いひ知れぬ感激の光がさしてゐた。

「おゝ見る、手旗をやりだしたぞ。正太、お汝、話してみろ」

船長に云はれて、正太は手旗をとつて、ブリツヂの屋上へ上つた。

焼津の漁師なら誰でも手旗信號ぐらゐできるのだが、最近まで海兵團へ行つてゐた正太が、特にえらばれたのである。

先方の手旗が動きだすと、漁師たちは聲をそろへて、その文字を読みだした。

「タ、イ、リヨウ、ヲ、シユ、ク、ス……」

「うへッ、潜望鏡で俺つちの漁を見てたんだな」

誰かゞ、すつとん狂な聲をあげた。

「ゴブウンライノル」

正太が手旗を返すと、こんどは

「テンマセンニテ、ウヲモチキタレ」
と信號された。

「よーし、すぐ持つてゆくと返事をしろ」

船長が上ずつた聲で叫んだ。

「おゝ、豪勢ぢやねえか。お初を海軍さんに食べてもらふんだ」

「たまんねえな、おらに持つてゆかしてくれ」

「だめだ、おらが行く、おらが行く……」

若い衆らは、極度の疲労も忘れたやうに、争つて起重機の綱にかゝり、傳馬船をおろした。結局、正太と壯平といふこれも海兵團にゐた若い衆がえらばれて行くことになつた。

まだピクピクと動いてゐる釣りたての大鯉を四五十匹、大笹の中へ入れて傳馬に移すと、正太と壯平はニッコリ笑つて、二丁櫓で漕ぎだした。

「ヨイン！」「エイン！」

「ヨイン！」「エイン！」

初め櫓口かじりをあはせるやうに出してゐた掛聲も、いつかまた、お祭の音頭にかはつてゐた。

「ヤレコラサーノエー……アンエイトー、アンエイトー、アンエイトー……」

聲をそろへて漕いでゆくうちに、正太は何ともいへぬ嬉しさに、五體がしびれるやうな氣持になつた

十八のとき、初めて入江さまのお神輿をかついで、肩の肉がゑぐれるほど揉みに揉んだあのときの氣持、……どこかで、桃われ髪もみづみづしい水蜜桃のやうな美代子が、黒目がちの大きな目をみはり、ポツと赤く頬を染めながら眺めてゐるやうな氣がした。

あとがき

この本は自分にとつて、漁民文學立願後の最初の短篇集として、さゝやかながら忘れられぬ意味をもつてゐる。「鱒」は前著長篇「鯉漁港」より古く、昭和十八年一月の作であり、「美し魚」が一ばん新しく、この四月に書下したものである。

漁民文學については、前著のあとがきに一私見を書きとめておいたが、戦時下この文學のもつべき二つの面——農民政學的面（主として食糧生産）と海洋文學的面（主として海防・運輸）は、その後の状況において兩者ともますます重要さを加へてきた。特に後者における機帆船の役割は、急激に増大されてきた。だが、今はまだそれを作品として公表する時期に達してゐないので、この集ではたゞ前者すなはち食糧増産の分野だけしか扱はれてゐない。これは自分としても残念であり、これだけに停まつてゐてはならないと自戒して

はゐるが、今のところどうにも止むをえない。今後情勢のゆるす限り、後者の方へも進んでゆきたいと思つてゐる。

それやこれやの準備のため、私は舊臘から郷里沼津へ歸住してゐるが、この五月十一日この本の校正を見るために久しぶりで上京した晩、突然母に死なれてしまった。二人きりで晚餐の卓をかこんで、私の持つてきた漁村の土産物などを、おいしいおいしいと云つてたくさん食べ終るとまもなく、脳出血で倒れたのである。享年七十六。

長い間、このやくざな怠け者を、慈愛し、鞭撻してくれた母を亡くして、私は一時四邊がまつくらになつてしまつた。だが今、やさしく強い母の魂は、この限りない悲しみの底から私をひき起して、更に力強く前進させようとしてゐる。

昭和十九年五月二十三日

沼津市下河原町二〇

橋爪健

昭和十九年七月十日 初版印刷
昭和十九年七月二十日 初版發行

美し魚

(一〇〇〇〇部)

◎定價金二圓
特別行爲稅相當額五錢
合計金二圓十五錢

著者 橋爪健

發行者 東京都豊島區池袋二ノ一一一六 徳岡武

印刷者 東京都小石川區林町四三 中村楠
(東京四九〇)

認 承 會 出 版
い 490113 號



發行所

東京都小石川區竹早町三五
振替口座東京一六五一六一番
(會員番號 一一二二三五番)

紙 硯 社

配 給 元

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

終



賣價(税込)¥2.15